



### 松本清張作品読み解く 中国の教員・山本さん 出版報告会

中国・上海にある復旦大学の副教授・山本幸正さんが「松本清張が『砂の器』を書きまで」(早稲田大学出版部)を刊行した。新聞小説を切り口に清張作

紙で小説を連載できる作家は限られていた時代背景を説明し「清張はそこに何とかが割って入ったか」と語った。山本さんは、文芸評論家

の荒正人の言葉を引き、1950年代当時は作家として「新聞小説の常連」が「現代の英雄」だったと解説。発行部数が多い全国紙の朝刊が最も華やかな舞台であり、吉川英治や獅子文六、石坂洋次郎、石川達三らがその席を占めていた。山本さんは、清張が地方紙、アロックス紙での連載を

他の新聞小説を巡っては、清張が挿絵画家に絵柄を細かく指定したものの、作風を崩したくない画家が指針を拒み続けた逸話なども紹介した。山本さんは「小説を発表する媒体によって清張がどのように読者を想定したのか、細かく見ていくと面白

【俳誌】『うたな集』より、国米子「紅葉川流れゆつたり曲りゆく」、野本未枝「軒先につるす干柿たれむ平」、篠崎光城「煤松む逃亡謀家の主」。(松山市祇園町11の10、俳句会、800円) 【紙面編集】岡崎詠真

### 四季録

先日、「芝不器男是非句大会」が松野町で開催されました。第六十六回大会をそこで、地元の方々の熱意に心より敬意を表します。私もこれを機に「芝不器男句文集」を丁寧に読み返し

1句目は同15(1926)年に、2句目はその前年に俳誌に発表されています。松丸に汽車が通い始めたのは、同12(1923)年です。だから、その頃の作かと思えます。宇和島輕便鐵道

り過ぎた。(中略)僕的好きたった道乃谷も鉄道敷設のため、まるで変わってしまった。(中略)切り取られておごたらしく露出している赤い崖。谷を無慮に埋めた線路。その上に赤黒く

風呂が沸く音が心に温かい。八幡浜 野井 澄 余生とは与生と悪い日々生きる 同 岡田 加代

へんみ・ちづ 1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハンコ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食うひと」で講談社ノンフィクション賞、「眼(め)の輝」で高見順賞、「増種版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下にぬるい水」「青い花」「純粋な幸福」など著書多数。

### 作家・詩人 辺見庸さんに聞く



### 相模原殺傷 16日地裁判決

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の前松聖被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。

# 文化

## 隠された優生思想 表出 死刑は被告と同じ論理

すとしたら、その瞬間に同法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを最も単純な形で証明することになる。私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならぬ」と考える「園

が「在る」「ない」を定めることはできません。けれども日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者…。あらゆる場所に優生思想が染みわたって

いる。ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのようにな偽装をしています。たまにテレビに登場させれば「ハートウォーミング」な文脈に回収してしまふ。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さとはどうもないもので、それに見合っリアリティが番組には全く欠けています。本当は自分の周囲から排

除している人、見ないようになっている人々、忘れようとしている人たちを、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおまじかじかというものです。 ■本音 都合の良いものだけに囲まれて生きていたい。「存在」を意識から消したい。えたいの知れないそんな

「本音」が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太く深い打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的

「存在していい人間」と「存在してはいけない人間」を選別する。前松被告、私は「さとくん」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していったとされている。裁判所がもし、死刑判決を下すとしたら、その瞬間に同法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを最も単純な形で証明することになる。私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならぬ」と考える「園

### 偽装

意志とは関係なく「在りてしまふ」という美存について、私たちはよりあやうく「そういうものなのだ」と引き受けざるしかない。他人



殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」 ー2016年、相模原市緑区

「月」寓意(ぐうい)に満ちた叙事詩としても読むことができる長編小説。2018年出版。物語は「園」に人所する「きーちゃん」の独白を基調に進む。全く動けず、目が見えず、思うように話せないきーちゃんは、自分を見た者が「ありさまの善悪」から発するおぼたまりの文芸オキナクニ…」や「おからさまな嘆息」で自身の姿を想像する。「在りつづける」ことを誰かに請われているわけでもなく、誰にも分かってもらえない痛みを抱えながら「在る」ことを考え続けるきーちゃんは「だれがむもそおよく」な職員「さとくん」に心を許している。だがさとくんはある日「敵対者」の空気をまとってやって来る。

な人間だということに扱えば扱えばほど、事件の真相からは離れていく。「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではないかと。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではないかと。まざましい暴力を發動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にびたりと同調していた。「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を「それはいいのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要で、それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳(じゅんげん)さが問われることだ。死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。



# 少年軟式野球大会 中学生